

「彗星の探究 (7)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

8月15日の晩、もう一度ネオワイズ彗星の撮影を試みた。今回は少しでも鮮明の彗星の姿をとらえようと思い、赤道儀も使用した。私の持っている「タカハシP2赤道儀」は学生時代に購入して、30年以上使っている。非常に頑丈で、一回も故障したことがない。アルカリ単一電池4本で、一晩中作動(恒星時駆動)するので、重宝している。



まず試験動作とピント合わせのテストを兼ねて、天の川を撮影してみた。やはり単なる三脚での撮影とちがって、星像が非常にシャープだ。ただし、森かげはすこしブレている。これは赤道儀が恒星の動きを追尾している為、地上の風景が動いて写るからだ。

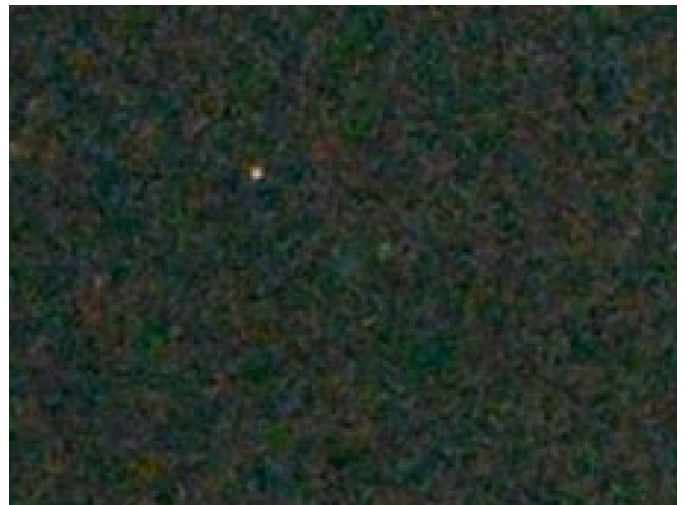


ネオワイズ彗星が位置している、うしかい座のアークトゥルス(写真の輝星)とおとめ座付近の星野(せ

いや)である。この中に間違いなくネオワイズ彗星が写っているはずなのだが、探し出すのに大変時間がかかった。



しかし、画像の一部を拡大すると、確かに彗星の特徴と一致する天体が写っていた。中央の青緑色の光芒がネオワイズ彗星である。等級は更に落ちて約8.2等。太陽からも地球からも日に日に遠ざかり、尾も短くなっている為だ。



更に4日後の画像がこれである。等級は9等以下に落ち、彗星の本体(コマ)の周囲のおぼろげな光芒が、辛うじて写っているだけだ。これが、私が撮影したネオワイズ彗星の最後の「後ろ姿」だった。私はこの写真をじっと眺めて、嘉内の詩を思い出した。

銀漢をゆく彗星は
夜行列車の様に似て
はるか虚空に消えにけり

まさにネオワイズ彗星も「宇宙空間の虚空」に去っていったのである。次に人類が目にするのは十万年も先のことである。十万年後の人類に、今年の観測記録が正しく伝えられれば、再到来を予測できるだろう。